ポスターセッションＰＩ

11月11日（水）16：30～17：55／展示室

座　長　グループホーム三滝ひまわり　管理者　玉田　将之　氏

座　長　株式会社えがお　仲村　美由樹　氏

テーマ１：人材確保・行政支援策、人材育成・定着、業務改善・環境改善、生産性向上（ICT、ロボット）、物価上昇・高騰対策 等

テーマ３：グループホームケア、パーソン・センタード・ケア、自立支援、自己決定支援、フレイル予防 等

テーマ６：重度化対応、医療連携、看取り、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）等

時間	演題 / 副題	所　属	発表者（都道府県）
16：30 〜	K様と過ごした364日 K様と私たちのエンジンルームを探す旅	グループホーム　すみちゃんの家	菅野　沙織 （宮城県）
16：40 〜	『できない』と思っていたのは、私たちだった。 〜認知症ケアの固定観念を見直した実践〜	フロイデグループホーム美和	笹﨑　圭太 （茨城県）
16：50〜　発表①〜②　質疑応答（５分間）			
16：55 〜	看取り期のグループホームにおける介護支援プロセス 本人の思いに寄り添い最期の時間を穏やかに過ごすための支援	株式会社　エムズ グループホーム　愛和の郷	セイン・タイ （宮城県）
17：05 〜	看取り期の支援と回復 家族とチームの力	グループホーム　北杜の郷	富江　房枝 （熊本県）
17：15〜　発表③〜④　質疑応答（５分間）			
17：20 〜	安心して夜勤業務に取り組める環境づくり 朝食介助時間の見直しによる夜勤職員の負担軽減	多機能地域ケアホーム ありがとうグループホーム	殿山　由奈 （広島県）
17：30 〜	単なる業務効率化ではないグループホームの生産性向上 パントリーの共有化が入居者の暮らしに与えた影響	グループホーム　すずらん紡	宗像　沙織 （福島県）
17：40 〜	高齢者グループホームにおけるICT活用の実践と今後の展望 ーケアコラボ・サイボウズ・MOT PBX・Googleフォームを活用した情報共有と業務改善の取り組みー	社会福祉法人ことぶき会 グループホームすみちゃんの家	伊藤　寿志 （宮城県）
17：50〜　発表⑤〜⑦　質疑応答（５分間）			
総　評			

演題番号
ＰＩ－①

K 様と過ごした 364 日

K 様と私たちのエンジンルームを探す旅

◆キーワード
1　進行性核上性麻痺
2　認知症グループホーム
3　本人本位支援

宮城県・東松島市　グループホーム　すみちゃんの家（すみちゃんのいえ）

発表者：菅野（かんの） 沙織（さおり）

2014 年 5 月開所。 1 ユニット 9 名の認知症対応型共同生活介護。 自然環境に恵まれた立地の中で、入居者様と共に家事や調理を行い、日々の暮らしの継続と「食」を大切にした支援を実践している。	地域との交流があり、生活の場としての繋がりを重視。 本人の役割や習慣を生活場面に位置付けながら、その人らしさを支えるケアに取り組んでいる

（取り組んだ課題・はじめに）
K 様は進行性核上性麻痺と嗜銀顆粒性認知症を併発しており、歩行障害や被害妄想などの症状がみられていた。
デイサービス、ショートステイを利用していたが、他者との関りが難しくなり、家族様の負担も増えたことから、令和 6 年 7 月にグループホームへ入居となる。
K 様の行動を単なる周辺行動として捉えるのではなく、世界観を尊重しながら安心して暮らせるような支援を検討した。

（倫理的配慮）
個人が特定できないように一部情報を加工した。
事例の使用については家族様へ目的を伝え同意を得たうえで、尊厳を尊重し作成した。

（具体的な取り組み）
入居当初は転倒リスクや環境の変化による不安の軽減を考え、ジョイントマットの使用や自宅で使用していたソファーを設置した。
座席など色々と工夫をしたが、他利用者様とは上手く関わることが出来ず、その分職員との関りを増やした。機関士時代に調理を担当しており、調理に積極的に参加してもらった。
病気が進行し包丁が使いづらくなっても、盛り付けや手でちぎるなどに変更し、調理に関わってもらった。『出来ないこと』よりも『出来ること』を重視して支援をした。
「エンジンルームに行く」と 2 時間廊下を往復することもあったが、車椅子を使用し、否定せず一緒に船を探し続けた。

（活動の成果と評価）
K 様に寄り添い関係性を積み重ねた結果、グループホームで落ち着いて過ごせる時間が増え、調理にも継続的に参加することが出来た。
職員から具体的な感謝や、怪我をして欲しくない気持ちを伝えることで支援を拒否することなく受け入れてくれた。
家族様への被害妄想もなくなり、長男様と穏やかに散歩をする姿を多く見ることができた。退居時には「入居時よりも父に優しくできるようになりました。父の自分たちへの態度も変わり、本当に感謝しています。」との言葉もいただいた。

（今後の課題・考察・まとめ）
進行性の病気があったが、最後まで K 様らしく 364 日を過ごすことが出来た。他利用者様とのトラブルはあったが、職員に対して暴力的な行動をとることは一度もなかった。
認知症のかたの世界観にとことん寄り添うことの大切さを学んだ。病気だから出来ないではなく、どうしたら出来るのかを考えることで、K 様の好きなことを続けることが出来た。
K 様のしたいこと、世界観に寄り添い、逃げずにコミュニケーションを取ることで支援を受け入れてもらえた。役割を持ち、出来ることを続けながら生活することが出来た。

（参考・文献など）
なし

演題番号
ＰＩ－②

『できない』と思っていたのは、私たちだった。

～認知症ケアの固定観念を見直した実践～

◆キーワード
1　PCC
2　ストレングス
3　チームケ

茨城県・常陸大宮市　ふろいでぐるーぷほーむ　みわ
フロイデグループホーム美和

発表者：介護職・笹﨑（ささざき）　圭太（けいた）

施設名　フロイデグループホーム美和 併設　　フロイデ　デイサービスセンター美和 　　定員　40 名	社会福祉法人博友会　理念 私たちは、お客様が住み慣れた地域で、いつまでも安心して暮らしていただくために必要な保健・医療・福祉の総合的なサービスの提供に努めます。

（取り組んだ課題・はじめに）
　認知症ケアでは、利用者の「できないこと」に目が向きやすく、職員が無意識のうちに生活の多くを代行しています場面が少なくない。その結果、本来持っている能力や役割が失われ、「その人らしい暮らし」が損なわれることもある。
当ホームでは「危ないから」「認知症だからできないだろう」という固定観念から、必要以上の介助を行っていた場面があった。
そこで、（ＰＣＣ）の考え方を取り入れ、「できないこと」ではなく「できること」「やりたいこと」に着目した支援へ転換することを目的として本実践に取り組んだ。
（倫理的配慮）
本発表は施設論理規程にもとづき実施した。
利用者および家族への発表を趣旨を説明し同意を得た。
個人が特定されないよう氏名・写真等は匿名化し、プライバシー保護に十分配慮した。
（具体的な取り組み）
①職員全体でＰＣＣについての勉強会を実施した。
②利用者一人ひとりの生活歴・趣味・好きなこと・得意なことを整理し共有した。
③「危ないからやらせない」ではなく、「どうすれば安全にできるか」を職員同士で検討した。
④洗濯物たたみ・食器拭き・配膳・花の水やりなど、一人ひとりに役割を持っていただいた。
⑤毎日の申し送りで「今日できたこと」「笑顔になった場面を共有し、成功体験を積み重ねた。
（活動の成果と評価）
本実践を通して、利用者の表情や発語機会が増加し、自発的な生活行為への参加が促進された。また、一人ひとりの能力や生活歴を踏まえた役割の提供により、自己有用感や自己決定を尊重した支援につながり、生活意欲の向上が認められた。
さらに、役割を継続的に担うことで生活リズムが安定し、不安や焦燥感の軽減がみられたほか、ＢＰＳＤ　（認知症の行動・心理症状）の出現頻度や程度にも改善傾向が認められた事例があった。
職員においては、「できないこと」に焦点を当てる従来のケアから「できること」や「残存能力」を活かすストレングス視点へ意識変容が促され、利用者主体のケア実践につながった。また多職種および介護職員間で生活歴やケアの視点を共有する機会が増え、アセスメントの質やチームアプローチの充実につながった。
これらの取り組みにより、パーソン・センタード・ケア（ＰＣＣ）の理念に基づく支援が施設全体へ浸透し、利用者一人ひとりの尊厳を尊重したケアの実践に繋がったと考えらえれる。
（今後の課題・考察・まとめ）
本実践を通して、「できない」と捉えていたのは利用者ではなく、職員自身の固定観念であったことを再認識した。利用者一人ひとりの生活歴や価値観、残存機能を踏まえた支援を実践することで、自発性や自己有用感が高まり、パーソン・センタード・ケア（ＰＣＣ）の理念に基づく、「その人らしい暮らし」の実現につながることが示唆された。また、職員間で利用者理解を深め、ケアの視点や支援方法を共有することで、チームケアの質の向上や、利用者主体の支援に対する意識の醸成にもつながったと考えられる。
今後は、継続的な職員教育や事例検討を通じて PCC の理念を施設全体へ浸透させるとともに、利用者様の尊厳と自己決定を尊重し、その人らしい生活を支え続けられるケア実践と質の向上に努めていきたい。
（参考・文献など）
1. トム・キットウッド「認知症のパーソン・センタード・ケア」筒井書房
2. 厚生労働省「認知症施策推進大綱」
3. 日本認知症ケア学会編「認知症ケア標準テキスト」
4. 認知症介護研究・研修センター「認知症ガイドブック」

演題番号
ＰⅠ－③

◆キーワード
1　認知症ケア
2　看取り支援
3　家族支援

看取り期のグループホームにおける介護支援プロセス

本人の思いに寄り添い最期の時間を穏やかに過ごすための支援

宮城県・仙台市

かぶしきがいしゃ　えむず　ぐるーぷほーむ　あいわのさと
株式会社　エムズ　グループホーム　愛和の郷

かいごしょくいん　せいん・たい
発表者：介護職員・セイン・タイ

さとう　ひかり
共同研究者：　佐藤　光

地域密着型グループホーム　2ユニット（計18名）	閑静な住宅街にあり、自然の移り変わりを肌で楽しむことができます。一人一人の今までの生活歴を大切に、その人らしい生活を送って頂いております。また、車椅子となっても、ゆったりと入浴できるリフトの個浴があります。提携の医療機関と、協力し看取り迄安心して過ごせる体制となっております。

（取り組んだ課題・はじめに）
A 氏は 80 代の認知症の男性で、温和な性格であり、自身の意思や感情を明確に表現することができた。また、「夫婦で一緒に生きていきたい」という強い思いを抱いていた。妻は A 氏の入居半年前から同グループホームを利用していたが、夫婦が同居していた頃は、A 氏が妻に対して強い口調で接することが多く、妻が委縮する様子がみられていた。また、娘とは、A 氏が仕事中心の生活を送っていたことから交流が少なく、親子関係にも心理的な距離が生じていた。このような背景を踏まえ、本事例では A 氏の「妻と一緒に生活したい」という思いを尊重しながら、夫婦の関係性や家族それぞれの思いを丁寧に把握し、本人・家族双方が安心して生活できる関わり方や生活環境について検討・実践した。

（倫理的配慮）
当事者および家族に主旨を説明し発表の承諾を得た。個人が特定されないよう仮名を使用し、施設の倫理規定および全国グループホーム協会の倫理方針に基づいて記載した。

（具体的な取り組み）
入居後は A 氏との関わりの時間を意識的に増やし、生活歴やこれまでの経験、家族への思いを丁寧に傾聴した。その結果、「もっと自分のことを知ってほしい」「妻に会いたい」といった思いが表出されるようになった。そこで、音楽療法や施設行事、食事の時間を活用し、夫婦が交流できる機会を継続的に設けた。また、その様子や A 氏の思いを娘へ丁寧に説明し、家族の理解を得ながら面会や交流を継続できるよう支援を行った。

（活動の成果と評価）
継続的な傾聴により A 氏と職員との信頼関係が深まり、家族に対する思いや希望を自然に表現できるようになった。夫婦が交流する中では、互いを気遣い笑顔で過ごす様子が見られ、良好な関係性を再び築くことができた。また、娘も面会に訪れるようになり、亡くなる前日には親子で「ありがとう」と感謝の言葉を伝え合うことができた。さらに、逝去後には妻がお別れをする機会を設けることで、夫婦・家族それぞれの思いに寄り添った支援につながった。

（今後の課題・考察・まとめ）
認知症高齢者への支援では、本人の思いを丁寧に傾聴し、その人らしさや大切にしている人間関係を理解することが重要である。また、本人と家族の意向が必ずしも一致しない場合には、介護職員が双方の思いを把握し、継続的な情報共有や対話を通して関係を調整していく役割が求められる。本事例では、本人の「妻に会いたい」という思いを尊重しながら家族の理解を得ることで、夫婦が穏やかな時間を共有でき、本人らしい看取りにつながった。今後も本人・家族双方の思いを大切にし、多職種や家族と連携しながら、その人らしい生活と人生の最終段階を支える支援を継続していきたい。

演題番号
ＰＩ－④

看取り期の支援と回復

家族とチームの力

◆キーワード
1　家族の絆
2　チームケア
3　状態改善

熊本県・熊本市　グループホーム　北杜の郷（ほくとのさと）

発表者：看護職　富江（とみえ）　房枝（ふさえ）　　共同研究者：　望月（もちづき）　紗歩里（さおり）

グループホーム北杜の郷　2ユニット（計18名） 平均年齢：89歳　介護度平均：3　認知度平均：2.9 施設は平屋1階建て	法人理念：で愛・ふれ愛・たすけ愛 施設理念：・科学的根拠に基づく介護 ・リスクマネジメントの周知徹底 ・地域の一員としての地域貢献

（取り組んだ課題・はじめに）
87歳女性、要介護5、アルツハイマー型認知症。
令和5年6月に自宅より入所。
当初は独歩でADLも自立されていたが、徐々に認知機能が低下し、BPSDが出現するようになった。
施設での対応が困難となり、専門病院へ3ヶ月間入院。退院時には歩行が困難となり、車椅子生活となって帰所された。
令和8年1月より食事、水分摂取が低下し、尿量も減少。1日排尿がみられない日が続くようになった。
低栄養状態が進行し、腸管内に多発性リンパ腫が発覚しご家族様・主治医と相談し、看取り同意書の締結を行い、看取り介護を開始となる。
（倫理的配慮）
発表にあたり、ご家族様へ内容を説明し同意を得た。
（具体的な取り組み）
●職員間の情報共有
普段の記録はタブレットで行っているが、これに加えて、些細な変化や気づきなどを紙でも記録し、職員間で共有できるようにする。
※重要な事項は申し送りノートへ記載し、全員が確実に把握できるよう努める。
●ご家族様への状況報告・情報交換
・日頃からご家族様への報告は行っているが、看取り期に入りご家族様の不安が大きいことを踏まえ、こまめな情報提供を実施する。
・特定連絡ツールを通じて、毎日の様子を写真や動画で共有し、状態の変化を分かりやすく伝える。
・面会については時間を定めず、ゆっくり過ごしていただけるよう居室での面会を可能とし、ご家族様が安心して寄り添える環境づくりに配慮する。
●ケアの見直し
・バイタル測定を1日2回、必要時は随時実施し、状態の変化を早期に把握できるようにする。
・食事摂取が困難なため、栄養補助食品を提供し、併せてご家族様が食べてもらいたいと持参されるバナナやプリンを提供することで、少量でも確実に栄養が入るよう配慮する。
・低栄養状態に伴う褥瘡リスクに対し、3時間ごとに姿勢を整え皮膚の状態の維持に努める。
・体調に応じて、入浴はシャワー浴・清拭へ切り替える。
●看取り介護の研修
初めて看取りに関わる職員や外国人スタッフから、不安や「何をすべきか分からない」といった相談があったため、職員全員で看取り介護の研修を実施。
（当施設では年2回の看取り研修を行っているが、今回の研修はその再確認も兼ねて実施し、看取り期におけるケアの目的、家族支援、記録の取り方など全員で共有する）
（活動の成果と評価）
食事を拒否する状態が続いていたが、本人希望によりバナナやプリンを1日2回摂取するようになったことで、徐々に水分も摂れるようになってきた。
　遠方に住むお孫さんが面会に来られた際には、しっかりと目を開け、両手でお孫さんの手を握りしめるなど、これまでに見られなかった反応が確認された。
職員間の情報共有と日々のケアにより褥瘡の発生はなく、食事摂取量も安定してきたため、ミキサー食から主食のみ全粥へアップすることができた。
同時に尿量も増え、浮腫も軽減も認められている。

（今後の課題・考察・まとめ）
今回、看取りとの向き合う中で、最も強く感じたのは「家族との絆が大きな力になる」ということだった。看取り期にはしっかりと家族の存在を理解し、安心した表情や反応が見られた。家族の寄り添いが、本人にとって大きな支えになっていることを改めて実感した。
また、職員ひとり一人が「この方のために何が出来るか」「どのような介護が最善か」を真剣に考えるきっかけにもなった。看取り介護だけではなく、日頃認知症ケアについても職員同士で話し合い、より良い介護を提供するための学びにつながったと感じている。

演題番号
ＰＩ－⑤

安心して夜勤業務に取り組める環境づくり

朝食介助時間の見直しによる夜勤職員の負担軽減

◆キーワード
1　夜勤負担軽減
2　朝食介助時間
3　業務改善

広島県・福山市

たきのうちいき
多機能地域ケアホーム　ありがとうグループホーム

とのやま　ゆな
発表者：殿山　由奈

みやけ　さき
共同研究者：　三宅　咲

2004 年 1 月開設　木造 2 階建　18 名定員 平均介護度 4.0	共用デイ、短期入所実施　各種加算算定 2017 年リビングオブザイヤーで最優秀賞受賞

（取り組んだ課題・はじめに）
夜勤帯は排泄介助やコール対応、居室訪問などが重なることが多く、さらに一部利用者の朝食介助を早朝から行っていた。そのため、他ご利用者への対応が遅れることや、夜勤職員の精神的・身体的負担が大きいことが課題となっていた。何をどのように改善するのがよいのか改善課題を見出すことが必要であった。、新人職員へ指導する際、朝食介助を 1 人で行う事への不安をどう軽減できるように伝えることができるか不安があった。安全に業務を行うためにも、見直しが必要と考えた。

（倫理的配慮）
今回の取り組み発表にあたり、入居者、職員、その他関係者へ目的を説明し同意を得た。また、施設長に許可を得ている。

（具体的な取り組み）
夜勤職員へ日々の業務の中で何が負担であるか、不安があるか聞き取り調査をした。
・食事介助中のコール対応が遅れる
・嚥下機能が低下している方への食事を安全に食べてもらうために時間がかかっている
・食事介助中にコールがなり中断することで、スムーズに食事ができていたが止まってしまう
・重度の方の移乗介助が大変である
・夜間の失禁の頻度と本人への負担
・事務仕事、雑務をする時間が取れない
など意見が出た。
一番意見の多かった食事面での負担軽減を考えた。利用者の朝食介助時間を夜勤職員が早朝に行っていたが、早出職員が出勤後の 7 時へ変更した。
利用者の体調や生活リズムに配慮しながら実施し、職員間で情報共有を行った。
また、取り組み後には職員へアンケートを実施し夜勤業務への影響や負担感について調査した。

（活動の成果と評価）
取り組み後、他の利用者の声や生活音が聞こえることで、利用者自身の覚醒がよく飲み込みもよく食事時間短縮につながっている。
また夜勤経験の職員 5 名にアンケートを実施した。身体的・精神的負担の軽減については 4 名が「ややそう思う」、1 名が「どちらともいえない」と回答した。夜勤全体の負担軽減については 4 名が改善を実感し、そのうち 1 名が「非常にそう思う」と回答した。一方、夜勤体制への満足度では 1 名が「全くそう思わない」と回答しており、今後の課題も明らかとなった。
自由記載では、「以前は夕食時に疲れて口が開きにくいことから、夕食時間から逆算して朝食時間を早朝から順番にしていたが 7 時からにしたことでスタッフの心にも余裕ができたと思うし、ご利用者も生活リズムが整ったことで排便も出やすくなった。食事を落ち着いてとることができ、みんなで食べることや、ある程度の一般的な時間に食事をすることの大事さも感じた。」「夜勤中での朝食介助が減ったため朝方の業務量は改善されたと思う。日によることもあるが余裕をもって業務にあたれていると思う」などの意見も見られた。
私自身も、新人の頃は朝食介助中にコールや自身で起きてこられた方への介助が重なることが多く「どのご利用者を優先すべきか」と不安を感じながら業務を行っていた。しかし、朝食介助時間を見直したことで時間的な余裕が生まれ、他の業務にも焦ることなく対応できるようになった。夜勤業務全体を落ち着いて進められるようになり、精神的負担の軽減につながったと感じている。

（今後の課題・考察・まとめ）
今回の取り組みにより、朝食時間を見直したことで夜勤職員の時間的余裕が生まれ、身体的・精神的負担の軽減につながった。また、新人職員も落ち着いてご利用者対応ができる環境づくりにつながったと考える。一方で、夜勤体制への満足度には個人差がみられたため、今後も職員の意見を聞きながら業務内容を見直し、より負担軽減に努め、より安心して働ける環境づくりを継続していきたい。

演題番号
ＰＩ－⑥

単なる業務効率化ではないグループホームの生産性向上

パントリーの共有化が入居者の暮らしに与えた影響

◆キーワード
1　生産性向上
2　人材確保
3　環境改善

福島県・須賀川市　グループホーム　すずらん紡（つむぎ）

発表者：介護リーダー　宗像（むなかた）　沙織（さおり）

すずらん紡は福島県須賀川市の外れ、長閑な環境にある認知症対応型共同生活介護。地域の商店街利用や地域の行事参加など交流を大切にしている。	2012 年 4 月　東日本大震災の翌年 NPO 法人豊心会 3 カ所目のグループホームとして開所。 2 ユニット　定員 18 名

（取り組んだ課題・はじめに）
介護現場では人材不足が課題となり、生産性向上が求められている。当事業所ではこれまで、各ユニットを繋いでいるパントリーを 2 分し、それぞれのユニットで管理し、動線は分断されていた。この環境は入居者同士、職員同士の交流の機会を減少させていた。

（倫理的配慮）
発表にあたり個人情報保護に配慮し、写真・事例は本人・家族の同意を得て使用しています。

（具体的な取り組み）
第一歩として令和 7 年度 11 月より 2 ユニットのパントリーの共有化をスタートした。パントリーの共有化を通して業務の効率だけではなく、ユニット間の交流の促進を実現することを第一の目的に取り組みを行った。

（活動の成果と評価）
この取り組みの真の評価は、入居者の日常にどのような変化が生じたかである。以下の 3 点においていずれも入居者の暮らしの質が具体的に改善されている。
①【新たな交流が生まれた】
パントリーの共有化と動線の整備により、入居者が自分の意志で隣のユニットへ行き交う姿が日常的に見られるようになっている。
新たな顔なじみの仲間や、職員が増えたことで入居者に安心感が生まれた。また、日常生活における社会的繋がりは、刺激となり、孤立感の軽減と生活の意欲の保持に繋がると考えられる。
②【活動の選択肢が広がった】
隣のユニットから歌声や笑い声が聞こえると、自ら向かわれレクリエーションや活動に参加されることが頻繁に見られるようになった。
また、元体育教師の入居者が、両ユニットの入居者を集め体操を指導するなど入居者の主体の活動も生まれている。活動範囲の広がりは生活の質へ直結している。
③【関りに充てる時間が増えた】
在庫管理に要していた時間が約半分に短縮された。捻出された時間は、入居者に関わる時間に還元されている。また職員側の効果も入居者への効果と直結する形で生まれている。職員同士にも自然な協力の意識が育まれ、ユニットどちらの入居者対応も柔軟に補え合える体制が構築された。合同でのお茶会、ドライブなど新たな取り組みも職員主体で行われるようになった。

（今後の課題・考察・まとめ）
今回の取り組みを振り返ると小さな物品管理の工夫から、動線が生まれ、心理的距離が連動し入居者同士の交流を日常化させた。グループホームにおける生産性とは介護現場において最も大切である「入居者の望む暮らし」のために活かせることである。
そのうえで、入居者の行動範囲が広がったことから起こりうる感染症発生時の拡大のリスク、転倒のリスクなどの課題と向き合う必要がある。具体的には感染症発生時の BCP の策定とシミュレーションを行い入居者が安心して過ごせる環境を守れること。
転倒リスクに対してはパントリーの環境整備（動線となる床に物を置かない）、ヒヤリハットの収集の促進を行い、入居者の自由と安全のバランスを職員で追及していくことが不可欠となってくる。
これから目指すものは、入居者の自由と安全の両立を全職員で実現しながら、どうしたら、目の前にいるひとり一人の入居者が、笑顔で安心して暮らせる毎日を積み重ねていけるのかを、皆で考え、工夫していける事業所であり続けることである。

（参考・文献など）

なし。

演題番号
ＰＩ－⑦

高齢者グループホームにおけるICT活用の実践と今後の展望

―ケアコラボ・サイボウズ・MOT PBX・Googleフォームを活用した情報共有と業務改善の取り組み―

◆キーワード
1　ICT活用
2　高齢者グループホーム
3　情報共有

宮城県・東松島市

社会福祉法人ことぶき会グループホームすみちゃんの家（いえ）

発表者：理事長　伊藤（いとう）　寿志（ひさし）

高齢者グループホームにおいて、ケアコラボ、サイボウズ、MOTPBXを活用し、情報共有と業務改善に取り組んでいる	

（取り組んだ課題・はじめに）

高齢者グループホームでは、交代勤務のなかで迅速かつ正確な情報共有が不可欠である。一方、口頭伝達や紙媒体中心では、伝達漏れや確認の重複が生じやすい。

当事業所では、介護記録はケアコラボ、連絡・文書共有はサイボウズ、即時連絡はMOT PBXと役割を分けて運用している。

本発表では、その実践内容を整理し、ICT活用の成果と課題、今後の方向性を検討する。

（倫理的配慮）

職員アンケートはGoogle フォームで任意実施とし、目的、匿名性、人事評価に影響しないことを説明した。回答は個人が特定されない形で集計し、発表目的のみに使用する。

（具体的な取り組み）

介護記録はケアコラボ、連絡・予定管理や文書共有はサイボウズ、即時連絡や写真・動画共有はMOT PBXを用いている。

各ツールの役割を整理し、「何をどこに残すか」の運用ルールを明確化した。

あわせてGoogle フォームで職員の実感と課題を把握した。

（活動の成果と評価）

ICT活用により、連絡の即時性が高まり、情報共有の抜けやタイムラグの軽減につながった。

写真・動画の共有は、利用者の状態や現場状況の理解を助け、支援の統一にも有効であった。一方、複数ツール運用による入力負担、過去情報の検索性、職員間の習熟度差が課題としてみられた。

（今後の課題・考察・まとめ）

ICT活用では、導入そのものよりも、現場に合ったルールづくりと継続的な見直しが重要である。

今後はアンケート結果も踏まえ、効果と負担を可視化し、優先課題を整理したい。ICTを利用者支援と職員の働きやすさを支える仕組みとして定着させることが重要である。

ICT活用は、記録・連絡・共有の質を高め、職員が利用者支援により集中できる環境づくりに寄与すると考える。

（参考・文献など）